

社会と繋がる一票

川南町 北原 智華

「選挙に行こう！」

誰もが耳にしたことあるはずなのに、足を運ぼうとまではしない若者。選挙に行くことで本当に何か変わるのか。

イメージが湧かないし、そもそも政治に対して興味がない。どこからともなくそんな声が聞こえてくる。

なんと悲しいことか。こう言っている私にも、先程述べた若者像と重なるような時期があった。20歳を迎え、管理栄養士養成課程の大学2年、専門科目の講義を受け実習レポートを書く合間で、アルバイトや部活動に向かう。

県外に進学したため世代の離れた知り合いは周りにいない。世界のすべては、小さな大学の構内で完結し、世間と切り離されているようではあるものの、大して違和感もなかった。そんなわけだから「もっとこうあればいいのに」と世の中に思いを馳せるような機会は皆無に等しかった。

「私にできることって何だろう」この言葉がふつふつと湧いてきたのは8年前の口蹄疫の頃だ。遠く離れた地で全容が掴めず不安は膨らむ一方だった。いてもたってもいられず、インターネットで情報をかき集め、所属していた英会話サークルで時間をもらいA4用紙1枚にまとめたものを配った。

現状を知ってほしい。その一心だった。時にはアルバイト代の一部を募金したりしたが、行き場のない不安は拭えなかった。

そして私は気付いた。「私は地元のことをなんとなくしか知らないし、今住んでいる地域のこと、日本のことも、全然知らない。」ということ。

まず知ることから始めてみよう。それからとにかく足を運び、人と話し、五感で知ろうと駆け回った。

住んでいるところが現実味を帯び始めた。暮らしと社会が繋がっている感覚を、この頃から感じるようになった。食卓に並ぶご飯ひとつとっても、食材の命のみならず、その食材を育てる農家の方々、運送する人、販売する人、品質管理をする人、パッケージを考案する人、調理器具や食器を作る人など、たくさんの人の支えや努力によって成り立っているのだ。口蹄疫が私の日常を変えた。

地域を好きになり、目を向けるようになる入口は、その人が今もっている「好き」を探す事だと考える。

なぜ冒頭で若者の政治への無関心を嘆いたのか。それは一人一人のもつ「好き」と社会は必ず繋がっているからだ。

動物が好きであれば、動物園に行ったりペットとして飼ったりするだけでなく、自然のなかを歩き回ることや農家さんとおしゃべりするなかで得られる発見もあるだろう。

音楽やスポーツが好きであれば、練習できる施設に詳しくなり、一緒に楽しむ人、教えてくれる人、楽器や道具を作っている人あるいは販売している人と出会うこともあるだろう。

自分の「好き」を形作るもの。そこには必ず他者が関わっていて、仕事、暮らし、社会がある。それに気づくことが出来たとき、社会や政治との距離は、きっと縮まる。

私は今、管理栄養士として地域のなかで働いている。学生時代に見つけた「地域」「人」「栄養学」という3本柱の揃った環境で経験を積めることはこの上ない幸せだ。

心も体もいきいきと暮らす人が溢れる世の中にしたい。あなたならどんな想いのもとに、どんなアクションを起こすだろう。

私なら自分の「好き」を形作ってくれる人に投票したい。それは権利を持つ人ならば誰もが起こすことの出来るアクションだからだ。今一度考えてみてほしい。自分に与えられている権利のことを。

若い人たちのWANTが集まれば、未来は何か変わるかもしれない。

「こうしたい！」という想いは自分一人で叶えられなかったとしても、あらゆる分野の人がスクラム組んで向かっていけば、描いた未来に近づいてゆけるかもしれない。

世界を1ミリ幸せにという気持ちを一人一人が抱き、小さなアクションを詰み重ねる。そのアクションのひとつは紛れもなく今を生きる私たちの1票なのではないだろうか。